

編集後記

編集長(ダン シロウ)

今号からの新連載が二本。どちらも新しいタイトルでの再登場である。連載継続のまま新タイトルに変わっていった方も、複数のタイトルを連載中の人もいる。一方、連載をしていることが何年経っても記憶定着しない執筆者もあって、毎回僅かながら督促対象になる。これ、苦言を呈しているのではない。それで多様なのだと考えようとしている。

大所帯の執筆陣である。それぞれに個人の事情も発生する。マガジン連載を中心に生きているわけではない。思いがけないこととの遭遇も少なくない。それも含めての長期連載だから休載がでるのもやむなしである。

編集部の手配に、全員が合わせすぎないことにも意味はあるのだろう。しかし編集者は几帳面でないと、雑誌なんて直ぐ発行遅延、合併号、休刊なんてことになる。

仕事じゃない、ボランティアなんだから…なんて気持ちで、発行がズルズル遅れた薄っぺらい学会ニューズレターの編集後記に、「なかなか原稿が集まらず、多忙に任せてついつい発行が遅れてしまいました」・・・などと何の反省もない定型文を書いてしまえる俗物が嫌いである。

世に棲息するそんなありきたり群に反旗を掲げ、スマートな個人連帯としてのマガジンが、そろそろ五〇号なんて節目を意識し始めている。

*

執筆者短信を見ていると、マガジン執筆者の間で「ネコ」を飼う人が増えているらしい。連載「そうだ、ネコに聞いてみよう」の増殖能力は絶大である。面白いことがいろいろあるもんだなあ、到着原稿を見ながら思いを巡らせているところだ。

編集員(チバ アキオ)

こんなことも編集会議で話題になった。「自分をどう満足させるか?」「どう満たすか?」である。

若いころそれを行うことで自分が満足できていた行動でも、年を重ねるとその行動では満足できなくなっていく。自分自身も変わる。この世には変わらないものはない。体を使うことはそもそもできなくなることもある。「こんな一日を過ごしたくはなかった…」、一日の終わりに誰しもそう、思いたくない。「これをしている自分が好き」と思うことがあればうれしい。

とはいえ、自分自身が満足できる行動はそんなに多くはない。「千葉さん、趣味は何ですか?」といわれることもある。「趣味」といわれると困る。ずっと仕事では大変ですよ、趣味を持った方がいいとも言われる。趣味といわれても、こうして編集会議をしたり、編集をしていたり、読書会をしていたり、トークライブをしていることに満足している。趣味か?といわれるとある意味趣味かもしれないがそうでもないような気もする。

就労支援の福祉施設に勤務していたころ、私はしきりに就労が本務の施設なのでこうあるべき!生活施設とはちがうのだから!ということに縛られていた。そんな時にスーパーバイザーに言われた。「千葉君、働くことも生活やで」と。今やコロナでのオフィス縮小というリフォーム市場では、働くように暮らし、暮らすように働く、そんな早く出勤したくなるようなオフィスづくりが話題と聞く。行きたくなる場所にしていくことに、趣味も仕事もない。やはり全て生活なのだ。

対人援助学マガジンの活動もある意味生活であり、暮らしなのだ。書く人は書くし、読む人は読む。集まることもあるし、オンラインでつながることもある。さらにマガジンの連載テーマは人々の生活そのもの。こうしてそれぞれのコミットの仕方でマガジンを取り込みながら、暮らす人たちの集まりなのだ。とあらためて思った昨今のマガジン活動でした。

編集員(オオタニ タカシ)

マガジン47号を無事に送り出し、2021年も間もなく年の瀬を迎えます。個人的な区切りですが、10号から編集にかかわるようになって、もうすぐ丸10年を迎えることとなります。就職したばかりの新人の頃、講師として来られていた団編集長に

「とりあえず10年やらないと」と言われたことは今でも記憶に残っていて、少なくとも10年以上に渡って「辞める」という選択肢が頭に浮かばなかったのは、この言葉の影響が大きいと思っています。だから、マガジンの編集もこの10年の区切りを超えられそうなことは、ちょっとだけ誇りです。

コロナ禍を経て、リアルに会っていた人とオンラインで会うという機会ができ、またコロナの感染が落ち着いたことで、この期間にオンラインで出会った人と初めてリアルに会うという機会も生じてきました。

リアルとオンラインの二重の関係性は、コロナ禍が生み出したものであり、今後も続いていくと思われます。個人的には、不定期で連載している「執筆者訪問」での体験もこの二重の関係に近いものがあると感じています。リアルの劣化版や代替としてのオンラインではなく、より複合的なつながりとして機能するオンライン・オフラインの関係性をどう楽しめるかが、時代から問われていることであるように思います。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン 通巻47号

第12巻 第3号

2021年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第48号は2022年3月15日

発刊の予定です。

原稿締切2022年2月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

モノクロ漫画に色彩を一つだけ加える
とすると赤は映える。赤いモノを探して、それをテーマにヒトコマ漫画を描くやり方がある。

ポスト、赤信号、サンタクロース、トマト。稲荷の鳥居に日の丸、中国の国旗、そして「血」。

吸血鬼や献血、殺人現場、輸血、いろいろ場面が思い浮かぶ。

表紙漫画の場合、バキュームカーの連想で、献血車を書いてみた。チャプチャプ混合された ABOAB 型のハイブリッド輸血運搬。

こんなあぶないモノはない？のだろうね。混ぜるな危険！か。最近血液サラサラ剤の服用者が多いらしいから、大丈夫かも。

団士郎 (2021/12/15)